5.5 GWスペシャル《三大交響曲》 ター・祝〉東京オペラシティコンサートホール/14時開演

GW Special Concert "Three Greatest Symphonies" Monday, 5th May, 14:00 / Tokyo Opera City Concert Hall

指揮ダニエル・スミス 6~ジ

Conductor DANIEL SMITH

コンサートマスター 小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

シューベルト 交響曲 第7番 ロ短調 D759 〈未完成〉 [約25分] 11ページ

SCHUBERT / Symphony No. 7 in B minor, D759 "Unfinished"

- I . Allegro moderato
- II. Andante con moto

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調作品67〈運命〉 [約31分] 12ページ

BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67

- I . Allegro con brio
- II. Andante con moto
- III. Allegro
- IV. Allegro

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調作品95〈新世界から〉 [約40分] 13ページ

DVOŘÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

- I . Adagio Allegro molto
- II . Largo
- III. Molto vivace
- IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

5.10 第166回 東京芸術劇場マチネーシリーズ (土) 東京芸術劇場コンサートホール/14時開演

The 166th Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series Saturday, 10th May, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

5.12 第571回サントリーホール名曲シリーズ 〈月〉サントリーホール / 19時開演

The 571st Suntory Hall Popular Series Monday, 12th May, 19:00 / Suntory Hall

指揮 ワシリー・シナイスキー 7~->

Conductor VASSILY SINAISKY

ピアノ デニス・コジュヒン 9ページ

Piano DENIS KOZHUKHIN

コンサートマスター 長原幸太 (ゲスト) Guest Concertmaster KOTA NAGAHARA

グリンカ 歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲 [約5分]

GLINKA / "Ruslan and Lyudmila" Overture

ラフマニノフ ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18 [約33分] 15ページ

RACHMANINOFF / Piano Concerto No. 2 in C minor, op. 18

- I. Moderato
- II. Adagio sostenuto
- III. Allegro scherzando

[休憩 Intermission]

ストラヴィンスキー 〈プルチネルラ〉組曲 [約24分]

16ページ

17ページ

14~-9

STRAVINSKY / Pulcinella Suite

- I . Sinfonia V . Toccata
- II. Serenata V. Toccata
 VI. Gavotta con due variazioni
- III. Scherzino VII. Vivo
- IV. Tarantella VIII. Minuetto Finale

ストラヴィンスキー 〈火の鳥〉組曲(1919年版) [約23分]

STRAVINSKY / Fire Bird (1919 version)

- I . Introduction
- II. L'oiseau de feu et sa danse
- III. Variation de l'oiseau de feu
- IV. Ronde des princesses
- V. Danse infernale du roi Kastcheï
- VI. Berceuse
- VII. Final

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] ※文化庁文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業)

[事業提携]東京芸術劇場(5/10)

5.17 第537回定期演奏会 (土) サントリーホール / 18時開演

The 537th Subscription Concert Saturday, 17th May, 18:00 / Suntory Hall

指揮 ワシリー・シナイスキー 7ページ

Conductor VASSILY SINAISKY

ヴァイオリン ワディム・グルズマン 9ページ Violin VADIM GLUZMAN

コンサートマスター 長原幸太 (ゲスト) Guest Concertmaster KOTA NAGAHARA

プロコフィエフ 交響曲 第1番 ニ長調作品25〈古典〉 [約15分] 18ペーツ

PROKOFIEV / Symphony No. 1 in D major, op. 25 "Classical Symphony"

- I . Allegro
- II. Larghetto
- III. Gavotta, non troppo allegro
- IV. Molto vivace

プロコフィエフ ヴァイオリン協奏曲 第2番 ト短調作品63 [約26分] 19ページ

PROKOFIEV/ Violin Concerto No. 2 in G minor, op. 63

- I . Allegro moderato
- II . Andante assai
- III. Allegro, ben marcato

[休憩 Intermission]

R. シュトラウス 交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの 愉快ないたずら〉作品28 [約15分]

R. STRAUSS/ Till Eulenspiegels lustige Streiche, op. 28

R. シュトラウス 〈ばらの騎士〉組曲 作品59 [約22分]

21ページ

20ページ

R. STRAUSS/ "Der Rosenkavalier" Suite

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [助成] ※文化庁文化芸術振興費補助金 (トップレベルの舞台芸術創造事業)

[協力] アフラック (アメリカンファミリー生命保険会社)

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。

5.30 第8回読響メトロポリタン・シリーズ (金) 東京芸術劇場コンサートホール/19時開演

The 8th Yomikyo Metropolitan Series Friday, 30th May, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

5.31 第72回みなとみらいホリデー名曲シリーズ (土) 横浜みなとみらいホール/14時開演

The 72nd Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series Saturday, 31st May, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

指揮 ミヒャエル・ザンデルリンク 8ページ

Conductor MICHAEL SANDERLING

ヴァイオリン カトリン・ショルツ 10ページ

Violin KATRIN SCHOLZ

コンサートマスター 小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

バルトーク トランシルヴァニア舞曲 [約5分]

22 _{%−∞}

BARTÓK / Transylvanian Dances

- I . Dudelsackpfeifer
- II . Bärentanz
- III. Finale Allegro

ブルッフ ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調作品26 [約24分] 23ページ

BRUCH / Violin Concerto No. 1 in G minor, op. 26

- I . Allegro moderato
- II . Adagio
- Ⅲ. Allegro energico

[休憩 Intermission]

ブラームス 交響曲 第2番 ニ長調作品73 [約40分]

24ページ

BRAHMS / Symphony No. 2 in D major, op. 73

- I . Allegro non troppo
- II. Adagio non troppo
- III. Allegretto grazioso (Quasi Andantino)
- IV. Allegro con spirito

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

[助成] 会文化庁文化芸術振興費補助金(トップレベルの舞台芸術創造事業)(5/31)

[協力] 横浜みなとみらいホール (5/31)

[事業提携]東京芸術劇場 (5/30)

オーストラリアが生んだ新鋭 期待が膨らむ読響デビュー

ダニエル・スミス

Daniel Smith



◇5月5日GWスペシャル《三大交響曲》

1981年、オーストラリア生まれ。シドニー音楽院修士課程修了。ロンドンのトリニティ・カレッジやアスペン指揮アカデミー、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学でも研鑽を積み、ヨルマ・パヌラ、ネーメ・ヤルヴィ、パーヴォ・ヤルヴィ、ジャンルイージ・ジェルメッティ、ヒュー・ウルフ、ペーター・ギュルケに指揮を学んだ。2012年、フィテルベルク国際指揮コンクール優勝およびゴールデン・バトン賞、オーケストラズチョイス賞の受賞で注目を集め、さらに同年に開催されたショルティ国際指揮コンクールで第2位入賞を果たしてから、国際的な評価を急速に高めている。他にもルイージ・マンチネッリ国際オペラ指揮コンクール第1位やルトスワフスキ国際指揮コンクール・オーケストラズチョイス賞など、多数の受賞歴を誇る。

ニース・フィルでの圧倒的なデビューの後、マリインスキー劇場管、hr (フランクフルト放送)響、デンマーク国立響、ワルシャワ国立フィル、イェーテボリ響、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響、オーデンセ響などに客演、今後はロンドン・フィルやイタリア国立放送響など、世界の一流楽団との共演を予定している。アスペン音楽祭、シドニー・オリンピック・アーツ音楽祭など、音楽祭へも数多く出演している。

2013年には、イタリア・ペーザロで開催されているロッシー二音楽祭に歌劇〈ランスへの旅〉を指揮してデビューし、マリインスキー劇場にもデビューを果たした。他にもこれまでに〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉〈ジャンニ・スキッキ〉〈さまよえるオランダ人〉などを指揮し、オペラ指揮者としても今後の活躍が期待されている。

読響とは今回が初共演。

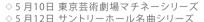
世界を舞台に活躍するロシアを代表する巨匠

ワシリー・シナイスキー

Vassily Sinaisky

Maestro

今月のマエストロ



◇5月17日定期演奏会



@Marco Borggreve

1947年、ロシア生まれ。モスクワ・フィルでキリル・コンドラシンのアシスタントを務め、レニングラード音楽院ではイリヤ・ムーシンのもとで研鑚を積んだ。73年にベルリンで行われたカラヤン指揮者コンクールで優勝したのを機に世界的なキャリアを歩み始め、ラトヴィア響首席指揮者、モスクワ・フィル音楽監督兼首席指揮者、ネーデルラント・フィル首席客演指揮者、ロシア国立響(スヴェトラーノフが率いていた旧ソヴィエト国立響)音楽監督兼首席指揮者を歴任。96年から現在までBBCフィルの首席客演指揮者を務め、2006年にはマルメ響(スウェーデン)の首席指揮者に就任し、その活動は高く評価されている。

オペラ指揮者としても、ムソルグスキー〈ボリス・ゴドゥノフ〉(サンフランシスコ・オペラ)、ビゼー〈カルメン〉、R.シュトラウス〈ばらの騎士〉(イングリッシュ・ナショナル・オペラ)、ショスタコーヴィチ〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉(ベルリン・コーミッシェ・オーパー)などで絶賛を博している。10年から13年までは、ロシアが誇る名門、ボリショイ劇場の音楽監督・首席指揮者の重責を担った。

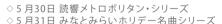
客演指揮者としては、ロイヤル・コンセルトへボウ管、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、北ドイツ放送響、ロサンゼルス・フィル、フィラデルフィア管、ロンドン・フィル、BBC響、バーミンガム市響、オスロ・フィルなど、世界各国の一流楽団に招かれている。また、録音にも積極的で、ロシアの主要な作曲家はもちろんのこと、シュレーカー、シマノフスキ、フランツ・シュミットなどのCDも高く評価されている。

読響とは07年2月に初共演、11年7月にも客演し、ロシア音楽を中心としたプログラムで聴衆を唸らせた。今回が3度目の共演となる。

偉大な巨匠のもとに生まれ 音楽の道を歩む期待の俊英

ミヒャエル・ ザンデルリンク

Michael Sanderling





@Marco Borgareve

読響の名誉指揮者でもあった世界的巨匠、クルト・ザンデルリンクの三男として 1967年、ドイツ・ベルリンに生まれる。生地で音楽教育を受け、当初はチェリスト として音楽家のキャリアを歩み始め、やはり読響の名誉指揮者でもあるクルト・マズ アに認められて東独の名門楽団、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管の首席チェリストに就任。ソリストとしてバイエルン放送響、パリ管、ボストン響などといった欧米 の名門楽団と共演を重ねつつ、後にはベルリン放送響の首席チェリストも務めた。

2005年に指揮者へ転向しドレスデン・フィルを指揮してデビュー。同楽団と集中的に共演を重ねた後、11/12年シーズンに首席指揮者に就任し、現在に至る。また、06年から10年まではポツダム・カンマーアカデミーの芸術監督兼首席指揮者を務めており、世界各地のコンサートホールに登場したほか、ソニー・クラシカルからリリースされているショスタコーヴィチの「室内交響曲集」を始め、複数のCDを録音した。

客演指揮者としてはこれまでにチューリヒ・トーンハレ管、バイエルン放送響、ミュンヘン・フィル、シュターツカペレ・ドレスデン、ベルリン・コンツェルトハウス管、シュトゥットガルト放送響、ケルン・ギュルツェニヒ管、ネーデルラント・フィルなど欧州の一流オーケストラと共演している。

また、指揮活動と並行して、欧州の主要なオーケストラで活躍する演奏家をフランクフルトのゲーテ大学に集め、若い聴衆に向けて親しみやすくカジュアルなコンサートを開催する「スカイライン・シンフォニー」というプロジェクトを10年に立ち上げ、注目を集めている。読響とは今回が初共演。

エリザベート王妃国際コンクール優勝で 一躍注目を集めた新鋭ピアニスト

デニス・コジュヒン Piano Denis Kozhukhin

1986年、ニージニー・ノヴゴロド (ロシア) 生まれ。 バラキレフ音楽学校でピアノを学び始め、マドリードの ソフィア王妃高等音楽院でドミトリー・バシキロフのも とでも学んだ。2009年、リスボンのヴァンドーム・コンク



@Marco Borggreve

ールで第1位、リーズ国際コンクールでは第3位に入賞した。10年5月には、圧倒的な評価を得てエリザベート王妃国際音楽コンクールで優勝を飾り、注目を集めた。

これまでにマルタ・アルゲリッチ・プロジェクト(イタリア)、サハロフ音楽祭(ロシア)、ルール・クラヴィーア音楽祭(ドイツ)、ルーブル美術館オーディトリアム・シリーズ(フランス)、プレステージ・シリーズ(米・ニューヨーク)など、世界各地の音楽祭に招かれている。

読響とは13年6月に名古屋・大阪公演で初共演。今回が2回目の共演となる。

◇ 5 月10日 東京芸術劇場マチネーシリーズ ◇ 5 月12日 サントリーホール名曲シリーズ

巨匠たちの黄金時代を彷彿とさせ 未来を予感させるヴィルトゥオーゾ

ワディム・グルズマン Violin Vadim Gluzman

1973年、ウクライナ生まれ。7歳でヴァイオリンを始めロマン・スネ、ザハール・ブロンに、90年にイスラエルに移りヤイル・クレスに師事。さらにアメリカのジュリアード音楽院でドロシー・ディレイと川崎雅夫に師事した。



©John Kring

ロンドン・フィル、シカゴ響、イスラエル・フィル、ベルリン・ドイツ響、チェコ・フィルなどと定期的に共演しているほか、ヴェルビエ、ラヴィニア、ロッケンハウスなど高名な音楽祭にも招かれている。また、BISレコードと専属契約を結び、レコーディングにも積極的に取り組んでいる。

使用楽器は、シカゴのストラディヴァリ協会の厚意により長期貸与された、レオポルド・アウアーが使用していた1690年製のストラディヴァリウス。読響とは今回が初共演。

◇5月17日 定期演奏会

ひたむきで情熱的な演奏が魅力 世界中で活躍するヴァイオリニスト

カトリン・ショルツ Katrin Scholz

ドイツ・ベルリン生まれ。5歳からヴァイオリンを始め、ベルンとベルリンでヴェルナー・ショルツとイーゴル・オジムに師事。1989年、第4回日本国際音楽コンクールで優勝、92年にはケルンのクーレンカンプ国際ヴァイオ



リンコンクールで優勝し、一躍脚光を浴びた。ドレスデン・フィル、MDRライプツィヒ放送響、ザールブリュッケン放送響など数多くのオーケストラからソリストとして招かれ、ゲルト・アルブレヒト、ウラディーミル・フェドセーエフ、ミヒャエル・ザンデルリンク等、錚々たる顔ぶれの指揮者たちと共演を重ねている。

98年からはベルリン室内管の芸術監督を務めており、来日公演も実現している。また、熱心な教育者としても知られ、98年からブレーメン芸術大学で教授の任にある。読響とは99、2005年に共演、今回が3回目の共演となる。

◇ 5 月30日 読響メトロポリタン・シリーズ ◇ 5 月31日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

柴田克彦

しばた かつひこ・音楽ライター

GWスペシャル 《三大交響曲》

5.5 (月·祝)

シューベルト 交響曲 第7番 ロ短調 D759〈未完成〉

作曲:1822年/初演:1865年12月17日、ウィーン/演奏時間:約25分

美しい歌と瑞々しいハーモニー溢れる、ロマンティックな "完成品"

ウィーンの"歌曲王"フランツ・シューベルト(1797~1828)が、持てるロマン性を存分に発揮した名作。有名な経緯は以下の通りです——1822年10月30日に作曲が開始され、第3楽章の9小節目までのオーケストレーションと中途のピアノ・スケッチをもって中断。しかし1823年、グラーツのシュタイアーマルク音楽協会の名誉会員に推挙された御礼として、仲介者ヒュッテンブレンナーに2楽章分の自筆譜が送られ、そこに留め置かれた。1865年にウィーンの指揮者へルベックがそれを発見し、初演された——。ただ現在は、ヒュッテンブレンナーへの個人的な贈り物だったとの見方が強まっています。未完成の理由は、病気の影響、あまり

未完成の理由は、病気の影響、あまり に美しい前2楽章に続く音楽を作るのが 困難だった……など、いろいろと推測さ

ウィーンの "歌曲王" フランツ・シュー れていますが、そもそもシューベルトはルト (1797~1828) が、持てるロマン 未完のまま放置した曲の多い作曲家。彼を存分に発揮した名作。有名な経緯は が2楽章分を"送(贈)った" ことは、完下の通りです——1822年10月30日に 成に準ずる意味をもつといえなくもありません。

歌に充ちた旋律と瑞々しいハーモニー溢れる、それまでにないタイプの交響曲。両楽章ともに3拍子で、曲調が一貫している点も特徴的です。

第1楽章 アレグロ・モデラート 冒頭 で低弦が奏する主題が随所に登場して象 徴的な役割を果たします。木管楽器が奏 する第1主題、チェロが歌う第2主題、 ともに美しさ満点。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 弦楽器が奏する第1主題とクラリネット が受け持つ第2主題を中心に、甘美な憧れを湛えた楽想が展開されます。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

作曲:1807~08年/初演:1808年12月22日、ウィーン/演奏時間:約31分

クラシック音楽の象徴となった、"暗"から"明"への劇的交響曲

インパクトのある出だしで有名なこの曲は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) が、耳の病を乗り越えて幾多の名作を生み出した、中期"傑作の森"の所産。対照的な曲調の第6番〈田園〉と並行して作曲され、同時に初演されました。

9曲それぞれに新機軸を打ち出したベートーヴェンの交響曲の中でも、この曲はとりわけ独創性に溢れています。一つ目は、もちろん運命動機の活用です。この動機を隙なく積み重ねて構築された第1楽章がまず斬新。さらに運命動機は、後続楽章にも登場して、曲全体に統一感をもたらします。二つ目は、ハ短調からハ

長調に至る「暗から明へ」「闘争から勝利へ」の明確な構図。これはベートーヴェンのトレードマークにもなりました。三つ目は、第3楽章の最後の音を盛り上げたまま第4楽章に移る手法。これも実にユニークです。四つ目は、交響曲史上初となるピッコロ、コントラファゴット、トロンボーンの使用。これらの楽器は第4楽章にのみ登場してサウンドの幅を拡大させ、勝利の凱歌に貢献します。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 運 命動機の連続で緻密に構築される緊迫した楽章。弦で柔和に奏でられる第2主題の背後でも運命動機が鳴っています。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 二つの主題を用いた美しくも雄大な変奏 曲。安らぎと緊張感が同居しています。

第3楽章 アレグロ 運命動機を中心と した主部と、荒々しい中間部からなるス ケルツォ楽章。不気味な経過部分が高潮 して第4楽章に入ります。

第4楽章 アレグロ 全合奏に始まる輝かしい凱歌。途中で第3楽章の運命動機が回想された後、果てしなく高揚していきます。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 **短調 作品95 〈新世界から〉

作曲:1893年/初演:1893年12月15日、ニューヨーク/演奏時間:約40分

異文化からの刺激と故郷への郷愁をこめた、巨匠のアメリカ便り

チェコ最大の巨匠アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904) 最後の交響曲。 1892年9月、すでに国際的な名声を得ていたドヴォルザークは、ニューヨーク・ナショナル音楽院の創立者ジャネット・サーバー女史からの熱心な誘いに応じて渡米し、1895年4月まで同音楽院の院長を務めました。そして滞在中に、当地で知った黒人霊歌や地元の音楽の要素と故郷ボヘミア色を融合させた名作の数々一弦楽四重奏曲〈アメリカ〉、チェロ協奏曲など――を残しました。その第1作が、渡米翌年の1~5月に作曲された〈新世界から〉。同年カーネギー・ホールにて初演され、空前の大成功を収めました。 同典におけるアメリカの影響は、アメリカ

同曲におけるアメリカの影響は、アメリカ 先住民の英雄を扱った詩「ハイアワサの歌」 から霊感を得たとされる第2、3楽章などに 表れていますが、作曲者自身「アメリカ先住 民の音楽やアメリカ民謡の精神を汲んで作 曲しただけ」と述べているように、あくまで イメージ的なもの。現地音楽への共感、アメ リカ自体の印象、母国への郷愁などが融合し た個性的な音楽であり、「新世界から」発信 された"アメリカ便り"ともいうべき作品です。 曲は名旋律の宝庫。特に第2楽章の旋 律は、日本でも下校時などの音楽として おなじみになりました。

第1楽章 アダージョ~アレグロ・モルト 序奏部のホルンによる動機は、全楽章に登場します。主部は、その動機に基づく第1主題、フルートとオーボエが奏する第2主題を軸に進行。

第2楽章 ラルゴ 郷愁に満ちた緩徐楽章。イングリッシュ・ホルンが奏する主題は、後に歌詞が付けられ、〈家路〉の名で普及しました。中間部の切なさを湛えた美感も胸を打ちます。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ スラヴ舞曲風ともアメリカの民俗音楽風ともとれる歯切れの良い主部に、軽く弾んだ中間部が挟まれます。

第4楽章 アレグロ・コン・フオーコ 力強く進むフィナーレ。行進曲調の第1 主題が中心を成し、クラリネットが歌う 第2主題のほか、前3楽章の主題も顔を 出します。管楽器の伸ばした音が減衰す る終結は大変珍しいパターン。

楽器編成/フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2 (イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (トライアングル、シンバル)、弦五部

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

飯尾洋一

いいおよういち・音楽ライター

第166回 東京芸術劇場マチネーシリーズ

5.10(+)

第571回 サントリーホール名曲シリーズ

5.12(月)

グリンカ 歌劇 〈ルスランとリュドミラ〉 序曲

作曲:1837~42年/初演:1842年、ペテルブルク/演奏時間:約5分

軽快で躍動感にあふれたグリンカの代表作

19世紀ロシア国民楽派の父と呼ばれる作曲家ミハイル・グリンカ(1804~57)のもっとも広く知られる作品が、この歌劇〈ルスランとリュドミラ〉序曲だろう。1836年、西欧偏重のロシア音楽界にあって、グリンカはロシア語によるオペラ〈皇帝にささげた命(イヴァン・スサーニン)〉によって大成功を収めた。翌年ニコライ1世から宮廷に招かれたグリンカは、第2作のオペラとして「ルスランとリュドミラ」を題材に選んだ。

物語の舞台は古代ロシアのキエフ公 国。悪魔に連れ去られた大公の娘リュド ミラ姫を、騎士ルスランが救い出して、 めでたく二人は結ばれるといった筋書き を持つ。前作の成功もあり作品は完成後 ただちに宮廷劇場に受け入れられ、また ロシアを訪れたフランツ・リストも作品に関心を寄せたが、歌手に問題があったこともあり、初演は不評に終わってしまう。作曲者はひどく落胆したが、作品はロシア国民オペラの一礎を築くものとして、後のロシア人作曲家たちに大きな影響を与えた。

この序曲は演奏会用の小品として人気が高く、しばしば単独で演奏される。躍動感あふれる総奏で開始され、小気味よく駆け回る弦楽器に続いて、はつらつとした弾むような第1主題があらわれる。やがて流麗で歌うような第2主題がヴィオラとチェロで演奏される。推進力を増しながら、生き生きとした楽想が華やかなコーダまで一気呵成に突き進む。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

ラフマニノフ ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 作品18

作曲:1900~01年/初演:1901年、モスクワ/演奏時間:約33分

独奏ピアノの圧倒的な名技性と豊かな詩情が融合した傑作

ロシアのノヴゴロド州セミョノヴォで 貴族の家系に育ったセルゲイ・ラフマニ ノフ(1873~1943)は、幼少より音楽 の才能を発揮して、早期にペテルブルク 音楽院とモスクワ音楽院で学んでいる。 モスクワ音楽院では厳格な教師として知 られるニコライ・ズヴェーレフの家に寄 宿して、毎朝6時からピアノの指導を受 けながら、広く音楽の基礎知識を学んだ。

教師ズヴェーレフはピアノの演奏技術を学ぶことに専念させるために、生徒に作曲を奨励しなかったが、作曲を志すラフマニノフはやがてズヴェーレフと激しく対立し、彼の家を飛び出てしまう。ラフマニノフは親戚のサーティン家で暮らしながら、ここでピアノ協奏曲のためのいくつかの構想をスケッチした。しかし、これらは完成に至らず、1891年、18歳でモスクワ音楽院ピアノ科を修了してすぐに、ピアノ協奏曲第1番を書きあげている。

1895年、ラフマニノフは最初の大作である交響曲第1番を完成する。97年に交響曲第1番はグラズノフの指揮によって初演されるが、この初演は演奏の不

備もあって、完全な失敗に終わってしまう。あまりの不評に傷ついた作曲者はしばらく創作意欲を失って、約3年間にわたりほとんど作品を書けなくなってしまう。だが、音楽に造詣の深い精神科医ニコライ・ダーリによる催眠療法をきっかけとして、ラフマニノフは自信と意欲を回復し、ピアノ協奏曲第2番の作曲に挑んだ。1901年、自身の独奏による初演は大成功を収め、作曲家ラフマニノフの名は一躍世に知られることになった。作品は恩人であるダーリに献呈されている。 第1楽章はモデラート。冒頭の序奏は故郷のロシア正教の鐘を模している。哀愁

第2楽章はアダージョ・ソステヌート。 瞑想にふけるかのようなピアノ独奏と、 管弦楽の柔らかな響きが、豊かな陰影を 生み出す。

を帯び、甘美な旋律美にあふれる。

第3楽章はアレグロ・スケルツァンド。 舞曲風の活発な主題と、優美で抒情的な 主題が対比をなす。ピアノ独奏が圧倒的 な名技性を発揮しながら管弦楽と一体と なり、輝かしい頂点を築く。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル)、弦五部、独奏ピアノ

ストラヴィンスキー 〈プルチネルラ〉 組曲

作曲:1919~20年(バレエ)、1922年頃(組曲)/初演:1920年5月15日、パリ・オペラ座(バレエ)/演奏時間:約24分

イタリアの古楽を20世紀の感性でよみがえらせたバレエ音楽

ロシア・バレエ団の主宰者ディアギレフは、D. スカルラッティの音楽を用いたバレエ〈ごきげんな婦人たち〉の成功を受けて、もう一人の古い時代のイタリア人作曲家、ペルゴレージの音楽を用いるアイディアを思いつく。イーゴリ・ストラヴィンスキー(1882~1971)がペルゴレージを崇拝していることを知っていたディアギレフは、ペルゴレージの手稿譜を見つけ出して、素材としてストラヴィンスキーに手渡した。

「常日頃から、民衆的で、スペイン的で異国風であるペルゴレージのナポリ音楽に心ひかれていた」というストラヴィンスキーは、ディアギレフのアイディアに共感し、コメディア・デラルテ(イタリアの仮面即興喜劇)の登場人物であるプルチネルラを主人公とした歌入りのバレエ音楽を作曲した。ピカソがバレエの背景と衣装を担当することも創作意欲を後押しすることになった。

ストラヴィンスキーは古いペルゴレー ジの音楽素材に歓喜をもって新たな生命 を吹き込んだ。これらの素材は「ペルゴレ ージの真の天性を味得させ、自分自身とペルゴレージの心的な血縁関係の近さを明らかにした」という。ストラヴィンスキーはクラリネットや打楽器を省略した簡潔な編成のオーケストラを採用し、そこに近代的な和声とリズムを付与して独自の色彩をもたらした。小編成のオーケストラはディアギレフの意に反するものだったため、振付師レオニード・マシーンは予定していた振付を変更することになったが、初演の舞台は振付、衣装、音楽すべての面でストラヴィンスキーを満足させた。

その後、ストラヴィンスキーはバレエ全曲から歌の入っていない曲を選んで、8曲からなる演奏会用組曲を編んだ。第1曲シンフォニア、第2曲セレナータ、第3曲スケルツィーノ、第4曲タランテラ、第5曲トッカータ、第6曲ガヴォット、第7曲ヴィーヴォ、第8曲メヌエット~フィナーレ。

なお、ストラヴィンスキーとディアギレフがペルゴレージ作と信じた素材の多くは、後にガッロやモンツァら他人の作であることが判明している。

楽器編成/フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット、トロンボーン、弦五部、独奏弦五部

ストラヴィンスキー 〈**火の鳥〉組曲** (1919年版)

作曲:1909~10年、1919年(組曲)/初演:1910年6月25日、パリ・オペラ座(バレエ)/演奏時間:約23分

ロシアの民話を題材とした、若きストラヴィンスキーの出世作

ストラヴィンスキー初期の三大バレエのなかでも、〈ペトルーシュカ〉〈春の祭典〉に先んじて作られた最初の作品がこの〈火の鳥〉である。1909年、ロシア・バレエ団のディアギレフは、翌年のパリ・オペラ座での公演のために、ストラヴィンスキーに〈火の鳥〉の作曲を委嘱した。当時、ストラヴィンスキーは数作の管弦楽作品を書いただけの27歳の若者にすぎなかったが、ディアギレフは前年に交響的幻想曲〈花火〉を聴いてこの新進作曲家の才能を確信していた。

作曲の期限が定められていることや、 大家たちと名を並べて大仕事に関わることに対して、若きストラヴィンスキーは 畏怖の念を抱きながらも、強い熱意をもって作品に取り組んだ。

物語はロシアの民話に基づく。イワン 王子は伝説の火の鳥をとらえる。火の鳥 は羽を一枚与えるから逃してほしいと嘆 願し、王子は火の鳥を逃す。王子は魔王 カスチェイの魔法にかけられた王女と出 会い、恋に落ちる。王女を救うために、 王子は魔王の城に乗りこむ。魔王は魔術 によって王子を石に変えようとするが、 火の鳥の羽の力で王子は魔術を防ぐ。火 の鳥の魔法によって魔王と手下たちは踊 らされ、やがて疲れ果てて眠りに落ち る。王子は魔王を倒し、めでたく王女と 結ばれる。

華麗なオーケストレーションを施された〈火の鳥〉は成功を収め、ストラヴィンスキーは一躍時の人となった。コンサートでも上演できるように、すぐに組曲(1911年版)が用意された。しかし、第一次世界大戦による混乱から、四管による大編成の〈火の鳥〉の演奏は困難になってしまう。そこで、ストラヴィンスキーは二管編成用ながら高い演奏効果を持つ新たな組曲(1919年版)を作りあげた。後に1945年にも組曲が作られているが、現在もっともよく演奏されるのは、この1919年版である。

序奏、火の鳥の踊り、火の鳥のヴァリアシオン、王女たちのロンド、魔王カスチェイの凶悪な踊り、子守歌、終曲の各部より構成される。

楽器編成/フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、シロフォン)、ハープ、ピアノ、チェレスタ、弦五部

プログラムノーツ

PROGRAM NOTES

広瀬大介

ひろせだいすけ・音楽学、音楽評論

第537回 定期演奏会 **5.17**(土)

プロコフィエフ 交響曲 第1番 ニ長調 作品25 〈古典〉

作曲:1916~17年/初演:1918年4月21日、レニングラード/演奏時間:約15分

「前衛」をうちに宿した、明瞭な「古典」の輝き

セルゲイ・プロコフィエフ(1891~ 1953)の作風として「鋼鉄のモダニズム」 といった類の言説を目にする機会は多い が、その置かれた立場と実際の作品を子 細に眺めれば、必ずしも「モダニズム」と は言い切れない作品もまた多い。確かに 若き日のプロコフィエフはペテルブルク で前衛的な作風を試していたが、決して 調性の枠組みを大きく踏み外すようなこ とはなかった。プロコフィエフが25~26 歳の時に〈古典交響曲〉を書こうと志した のも、チャイコフスキー以降、本格的な 交響曲の作曲が停滞した(そしてドイツほ どには交響曲が時代遅れとは見做されて いなかった) ロシアの音楽界に一石を投 じよう、という思いもあったはずである。

第1楽章、提示部における二長調のメ

リハリ豊かな冒頭主題は、プロコフィエ フが模範にしたというハイドンらしさを もっとも豊かに湛えたもの。この後のハ 長調への移行はさすがに「モダン」の名 にふさわしい。展開部を間に挟み、最後 の再現部において今度は逆にハ長調→ニ 長調と推移するシンメトリカルな構造を 作ろうとしたのだろう。緩徐楽章として 置かれた第2楽章ではあるが、この3拍 子にメヌエット的な優雅さを見て取るこ ともできる。本来メヌエットが置かれる べき第3楽章にガヴォットが来る点だけ が、ハイドンとは異なる。第1楽章同様、 第4楽章も典型的なソナタ形式による が、その最後では第1楽章の冒頭を再び 取り戻すかのような快活な主題で、楽曲 全体をまとめてみせる。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、 ティンパニ、弦五部

プロコフィエフ ヴァイオリン協奏曲 第2番 ト短調 作品63

作曲:1935年/初演:1935年12月1日、マドリード/演奏時間:約26分

スペインに想を得た、もうひとつの「古典」的協奏曲

〈古典交響曲〉の初演後、プロコフィ エフはアメリカ、そしてヨーロッパ各地 を拠点として活動を続けるが、故国ロシ ア、そして革命後のソ連において自作が どう受け取られるかを気にし続けてい た。1925年に作曲されたバレエ〈鋼鉄 の歩み〉などは、自らがソ連社会におい ても適切な音楽を提供し、祖国の発展に 寄与できる作曲家であることをアピール したものに他ならない。故国においての 地位を約束されたプロコフィエフは 1933年、ストラヴィンスキーとの競争 から逃れるかのように、ついにロシアへ と帰国する。帰国前に拠点としていたフ ランスのヴァイオリン奏者、ロベール・ ソータンのために作られたヴァイオリン 協奏曲第2番は、パリ、中部ロシアの都 市ヴォロネジ、カスピ海そばのバクーな どで手がけられており、この時期はまだ 比較的ソビエトからの出国は容易であっ たことがうかがえる。初演地マドリード では、折しも人民戦線政府が成立。社会 主義に対する共感が育ち、この演奏に政 治的な意義を重ね合わせようとする向き

もあった(翌年にはスペイン内戦が勃発する)。アメリカではヤッシャ・ハイフェッツがこの作品を多く取り上げ、曲の普及に大きな役割を果たした。

こうして完成したヴァイオリン協奏曲 第2番は、伝統的な3楽章構成をとる協 奏曲として、先述の〈古典交響曲〉と軌 を一にするところが認められよう。ヴァ イオリンが無伴奉で弾き始める第1楽章 冒頭の主題には、とらえどころのない前 衛的な響きと、ロシア民謡を思わせる懐 かしさが絶妙のバランスで同居してい る。クラリネットと弦楽器のピッツィカ ートによるしみじみとした伴奏にはじま る**第2楽章**は、プロコフィエフの作品の 中でもかなり息の長い旋律が独奏ヴァイ オリンで紡がれ、自在に変奏される。ロ ンド形式による第3楽章の舞曲的な冒頭 主題ではカスタネットが多用され、この 作品とスペインとの関係がしのばれる。 ヴァイオリン独奏主題をコントラバスと 大太鼓だけで支える4分の5拍子のコー ダ(終結部)では、斬新な音響を指向す る作曲家の試みが窺える。

19

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、 打楽器(大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、カスタネット)、弦五部、独奏ヴァイオリン

リヒャルト・シュトラウス 交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら〉_{作品28}

作曲:1894年秋~95年5月6日/初演:1895年11月5日、ケルン/演奏時間:約15分

「ロンド」という形式で端正に描かれる、いたずら者ティルの大活躍

1894年、リヒャルト・シュトラウス (1864~1949) は、世に問うた初の歌劇 〈グントラム〉が大失敗に終わり、生涯 初めてとも言うべき挫折にうちひしがれ ていた。すでに〈マクベス〉〈ドン・ファン〉〈死と浄化〉という交響詩で、自らが リストによって創始された新しい交響詩 というジャンルを引き継ぎ、発展させる ことを内外に喧伝したシュトラウスは、この〈ティル〉から徐々にその作風を深めていく。それまで以上に音楽で描く標題の内容と、単一楽章による音楽形式を 密着させていくことで、独立した音楽作品としての完成度を高めようとした。

作曲家自身による曲の説明(シュトラウスはこの種の説明をことのほか嫌がった)によると、この曲ではティルの次のようなエピソードが描かれているとされる。

ティルの主題→馬を駆って市場を荒ら す→僧衣をまとい道徳を説く→騎士に扮 して美女に求婚→断られ人類への復讐を 決意→俗物の学者と討論→逮捕され裁判 にかけられる→絞首刑→ティルの主題

各場面の間にティルそのひとの主題が たびたび登場するために、この作品には 「ロンド形式による」という副題が添え られた。もっとも、冒頭に登場する主題 は、「昔々、ひとりのいたずら者がいた」 と物語を説き起こすヴァイオリンの主題 であり、6小節目の快活なホルンの主題 によって、ようやく「その名はティル・ オイレンシュピーゲル」と続く。曲全体 は8分の6拍子と指定されているにもか かわらず、このホルンの主題は6拍子の 枠には収まらず、むしろ8分の7拍子や 4分の3拍子の旋律とおぼしき箇所すら ある。親しみやすそうに見えて、聴き手 の期待を欺くようなこの旋律こそ、ティ ルのいたずら心を端的に表現していよ う。作曲家によって選ばれた原作のエピ ソードはすべてが愉快なものというわけ ではなく、「人類への復讐を決意」「絞首 刑(このエピソードは原作にはない)」な ど、前作〈グントラム〉の失敗を相当根 に持っていたのではないか、と思わせる ような箇所すらある。

楽器編成/フルート3、ピッコロ、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、エスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、ラチェット)、弦五部

リヒャルト・シュトラウス 〈ばらの騎士〉組曲 作品59

作曲:1933~45年頃? / 初演:1946年9月28日、ウィーン (コンツェルトハウス) / 演奏時間: 約22分

数ある名作オペラの編曲から、この曲が頻繁に演奏されるわけは……

20世紀に作られたオペラの中ではもっとも高い人気を誇っている〈ばらの騎士〉。マリア・テレジア女帝治世下の18世紀ウィーンを舞台とする本作の聴きどころを集めた組曲が、すでに1911年の初演直後からさまざまな編曲で登場している、という事実だけでも、当時からこの作品が大いに愛されたことがしのばれる。シュトラウス自身も、曲中のここぞという場面で用いたワルツのみを集めた二種類のメドレーを編曲した。

数ある編曲のなかでも、いまなお頻繁に演奏されるほぼ唯一の曲は、1945年にブージー&ホークス社から出版された「組曲」である。これが一体誰の手による編曲なのか、いまだに定かではない。シュトラウスの全作品を網羅する作品目録にもはっきりとした記載はなく、ポーランドの指揮者アルトゥール・ロジンスキーによって、1933年から45年の間に亡命先のロンドンで編まれた「らしい」とされているに過ぎず、これだけわからないことだらけの曲も珍しい。

作曲家自身がオペラ作品の管弦楽組曲を手がけた他作品を参照すると、声楽の含まれない間奏曲や前奏曲を多く並べ、曲と曲をつなぐ補筆は最小限にとどめることが多い。一方でこの組曲は、第2幕の二重唱や第3幕の三重唱などが(声楽なしで)使われ、補筆もおよそシュトラウスのオーケストレーションとは思えないぎこちなさ。とはいえ、曲は以下のとおり(最後のオックス男爵のワルツを除いて)オペラの筋書き通りに並べられ、どこか交響詩のような充実感を聴き手に与えることも、この組曲が人気を保っている理由のひとつなのだろう。

第1幕:前奏曲→第2幕:銀のばらの献呈場面、オクタヴィアン・ゾフィーの二重唱→二人の逢引がヴァルツァッキとアンニーナに邪魔される場面→オックス男爵のワルツ "わしと一緒なら"→第3幕:元帥夫人・オクタヴィアン・ゾフィーの三重唱→オクタヴィアン・ゾフィーの二重唱→オックスが退場する際のワルツ→フィナーレ(オクタヴィアンのモティーフを援用したオリジナル)

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット3(エスクラリネット持替)、バスクラリネット、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、ラチェット)、ハープ2、チェレスタ、弦五部

プログラムノーツ

OGRAM NIOTES

舩木篤也 ふなき あつや・音楽評論家

第8回 読響メトロポリタン・シリーズ 5.30_(*)

第72回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 5.31₍₊₎

バルトーク トランシルヴァニア舞曲

作曲:1915年、編曲:1962年/初演:弦楽合奏版は不明/演奏時間:約5分

フィールドワークのみのり。ほんとうのハンガリー。編曲の妙。

ベラ・バルトーク (1881~1945) は 20世紀ハンガリーを代表する国民楽派 のひとりと目されている。ポイントは、 「似非ハンガリー」と「真正ハンガリー」 を区別しようとした、その並々ならぬ情 熱にあろう。「私は、民謡として広まっ たハンガリーの調べ――それらは実のと ころ、民謡ふうのありきたりな芸術歌曲 です――が興味の対象となりうるもので はないことを悟り、1905年、それまでま ったく知られていなかったハンガリーの 農民音楽の研究に向かうようになりまし た」。今ふうに言えばフィールドワーク。 彼はその奥義を、同じハンガリー出身の 作曲家ゾルターン・コダーイから学んだ。 まずマジャール語圏を、さらにはスロ

ヴァキアやルーマニアをも訪れ、土地の 歌を収集・調査した。このあたりの文化 圏と国境線の関係は複雑で、現在ルーマ ニア領であっても当時はハンガリー王国 領であった地域もある。トランシルヴァ ニアの一部はそのような一角であり、バ ルトークはここで知った五つの民謡を素 材に、1915年、〈ソナチネ〉という3楽 章からなるピアノ曲を書いた。そして 1931年、これを自身で管弦楽版に編曲 したのが〈トランシルヴァニア舞曲〉だ。 本日は同曲の弦楽合奏版を聴くが、こち らはハンガリーの作曲家ガボール・ダル ヴァシュ (1911~85) が1962年に編曲 したものである。

第1楽章 "バグパイプ吹き" 2種の舞曲 からなる3部形式。第2楽章"熊踊り" ゆっくりと進む若衆の踊り。第3楽章"終 曲"2種の舞曲が続き終結部がくる。最 初の舞曲はトルコふう。

楽器編成/弦五部

ブルッフ ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 作品26

作曲:1864年/初演:1866年4月24日、コブレンツ 改訂初演:1868年1月7日、ブレーメン/演奏時間:約24分

書いた本人をも悩ませた圧倒的なポピュラリティー

一見すると関連性の見いだしにくい本 日のプログラムだが、「ハンガリー」を キーワードに据えると3者は結びつく。 このマックス・ブルッフ (1838~1920) の作品が彼の代表作となった経緯には、 ハンガリー王国出身の名ヴァイオリニス ト、ヨーゼフ・ヨアヒムが絡んでいる。 ヨアヒムといえばブラームスの盟友だ。 ブラームスはまた、青年時代をハンガリ 一移民が多く暮らす北ドイツの港町ハン ブルクで過ごし、彼らが奏でるハンガリ 一音楽に大いに魅せられた。

ブルッフはもう少し南、ケルンの生ま れで、ブラームスより五つ年下になる。 享年82。作品数も決して少なくない。 それにしては音楽中においてやや影の薄 い存在だが、どうやらこれは、生前から そうだったようである。

いくつかの要因があろう。ブルッフが 最も精力的に作曲をした19世紀後半に おいて、先端をゆく音楽といえば、なん といってもリストやワーグナーの「新ド イツ楽派 | であり、それに対抗する古典 回帰派の最有力候補としてもてはやされ たのはブラームスであった。加えて、こ

のヴァイオリン協奏曲第1番の大成功が ----皮肉なことに----あだとなった面も 否めない。

本作は1864年に書き始められ、いっ たんは1866年に初演されたが、ヴァイ オリンの名人たちの助言を、とりわけヨ アヒムのアドヴァイスをいれて改作が重 ねられた。決定稿の初演は1868年。ヨ アヒム独奏によるその演奏は大受けし、 作品はたちまち有名になる。ところが、 ブルッフといえばこの曲というイメージ が、それで定着してしまったのだ。「私 が書いた作品はそれ1曲だけかね?」と は、ブルッフのある手紙にみえる一節で ある。ヴァイオリン協奏曲に関していえ ば、彼の作は第3番まである。

第1楽章は、中ほどに管弦楽による身 を切るようなクライマックスを置く情熱 的な音楽。やがて冒頭部分が戻ってくる と、長調による爆発があり、その後すぐさ ま沈静化、叙情的な第2楽章へとそのま ま移行してゆく。はっきりと切れ目を置 いて始まる第3楽章は、一転、ハンガリー ふうの明るい躍動感に満ちたもの。独奏 ヴァイオリンが華麗な技巧を披露する。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、 ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ブラームス 交響曲 第2番 ニ長調 作品73

作曲:1877年/初演:1877年12月30日、ウィーン/演奏時間:約40分

よどみなく書いた「黒枠」つきの田園シンフォニー?

1853年、ヨハネス・ブラームス (1833 ~97) は、ヨアヒムをとおして先輩作曲家の知遇を得る。ロベルト・シューマンである。シューマンは、すぐさまブラームスの類いまれな楽才を見抜き、激賞文を有力音楽紙に公表。ハンブルクの青年は、一夜にして注目の作曲家となったのだった。

シューマンの激賞文には、将来書かれるであろう「管弦楽など大規模な作品」への期待が記されているが、ブラームスが第1交響曲を書き上げたのは、それから23年後。着想から10年以上をかけての完成であった。

しかし、次は早かった。第2交響曲は、1877年の夏・初秋の数週間を経てすぐに完成。その間の滞在先となった、オーストリアはヴェルター湖畔にあるペルチャハの美しさが幸いしたのだろうとは、よく言われるところだ。そんな意見に真実味が感じられるのは、ほかでもない、この交響曲がきわだった牧歌性をたたえているからだろう。通常なら急速でにぎやかなスケルツォ(原義は「冗談」)になってもおかしくない第3楽章なども、のどかな舞曲、レントラーふうに始まる。

しかし、この交響曲を「田園」のイメージだけで受け取るのは禁物だ。

たとえばトロンボーンの用法。神的なものの象徴として、レクイエムなど、おもに宗教音楽で用いられるこの楽器は、世俗の交響曲において慎重に導入されてきた。ベートーヴェンも第5、第6、第9番のみで、それもごく限定的に使っている。対してブラームスは、この第2交響曲でなにかと目立つところで用いるのだ。こうしてみると、彼自身の次のことばも意味深長に聞こえないだろうか。「今度の交響曲は耐えがたいほどメランコリックなもの。スコアには「死を意味する」 黒枠を付けなくては!」

本作のいま一つの特徴として、動機操作の徹底性を挙げよう。第1楽章冒頭の低音弦、レ・ド♯・レ(定位置→隣接音→定位置)の動機に注目。これは同楽章内で繰り返されるばかりでなく、ゆるやかな第2楽章でも、短調の部分でトロンボーンの不気味な響きと共に現れる。急速な第4楽章にいたっては、「定位置→隣接音→定位置」の音運動そのもののヴァリエーションといった趣だ。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部